

- 1 〔まず家をたずねて小春日和知る〕
- 2 〔くちびるが先にまぶしくなる冬日〕
- 3 〔鯛焼をならべて君は肺呼吸〕
- 4 〔はなとはなとはなとちるものふゆうらら〕
- 5 〔なにもかも書けない手紙ならい吹く〕
- 6 〔再会けれど冬の話をする〕
- 7 〔ざっくりときみしい着ぶくれて新宿〕
- 8 〔何万回目の初雪いもうとの庭に〕
- 9 〔氷海の映画のように夜はじまる〕
- 10 〔ふりかえるときの顔から波の花〕
- 11 〔年守り針屋は針屋らしく座す〕
- 12 〔初風はくるしまぎれに目を覆う〕
- 13 〔彼らまた手だけにふれて雪のひま〕
- 14 〔果てになる感覚として春きざす〕
- 15 〔水温むなんかの花が咲いて壊れる〕
- 16 〔逡巡しはるの渚に同化しそう〕
- 17 〔白蓮ばかり受胎告知の声を聞く〕
- 18 〔◇◆◆◆◆◆◇ (ほうせきのつらなり) 春の雨ぼかす〕
- 19 〔周遊のまた春光を手放して〕
- 20 〔あたらしいフォントの茶摘唄つたない〕
- 21 〔花散らす距離にもたれて告白す〕
- 22 〔人魚姫そだててぐふふ甲府の駅〕
- 23 〔わたしもう猫をおもいだせない〕
- 24 〔欠陥した僕がかかれた本がある〕
- 25 〔うつくしいひとだったし名古屋城はでかかった〕

- 26 下町のミサを見過ごし夏に入る――
- 27 雑踏のなかで夏蝶雑踏のなかで――
- 28 余花暮れるせかいにまたとないつづき――
- 29 ぼんやりと薄暑を過ごすあそびかな――
- 30 王国にくる短夜のことが嫌い――
- 31 かきはじめうすみどりなる本の夏――
- 32 うすく咲くばらいつまでもしらない風――
- 33 夏の日や子供はちゃんと老いてゆく――
- 34 てまりばな祈るそうかもしれないと祈る――
- 35 西日ぐらついで星がでる準備――
- 36 はこばれてうなずく君が夏の鳥――
- 37 おーぷんかーはしらせまなつがうるさいなあ――
- 38 先生は恋多きひと夕端居――
- 39 前髪をかきわけすべて真珠にする――
- 40 身寄りまたなくした君を巢鳴で待つ――
- 41 ふちどりの鳥を愛せる秋のはじめ――
- 42 やさしくて秋蒔の影呼び起こす――
- 43 みんなないあとであふれ出す銀河――
- 44 人はまばらに秋をうむ井の頭――
- 45 すこしじぶん透かしてみせるとき鏡花忌――
- 46 ラフランス沁みゆくまひるまの座敷――
- 47 知ることになるしらつゆのいのちがけ――
- 48 母恋（ははこい）の少年かぼすから放つ――
- 49 黄落のなか手をふりかえしてゆめ――
- 50 秋の夜うまく散ってくらがりのひとびと――

- 51 わたし血を巨峰食べつくしてわかる――
- 52 母うつくし夜はしだれて秋の列車――
- 53 柚子について いちばんせつない眠りかた――
- 54 カフェは混雑秋の空うれしい――
- 55 すじこのおむすびむすびあいたる夜寒かな――
- 56 つじつまが合わない夜の須磨にきて――
- 57 子供だろうか そのくちぶえのあとの水――
- 58 やはり路地裏だろう十八を終えるには――
- 59 どうにもせつないサブナードの逃げ口――
- 60 靴ひもを結べぬきみといて枯野――
- 61 こはるこはるるひとびとすわらせてとじて――
- 62 どうぶつと呼ばれて冬がすみまぶしい――
- 63 ふがない手をつかまれて日短――
- 64 雪の夜の湯ぶねをしんとなぜている――
- 65 冬ずっとなみだのあとをたどるよう――
- 66 目をふさぐ花と呼ばれて冬の薔薇――
- 67 おおゆきふる波はなこうどのしらほね――
- 68 ポインセチア落ちてともだちの結婚――
- 69 こわされたものとして会う 湖に冬――
- 70 嘘がばれて正月までが長いよう――
- 71 歴史すべてたなびいてくるはつがらす――
- 72 ともだちの横顔を泣く氷湖の奥――
- 73 大雪に生きてるひふをぶち破るピアス――
- 74 呼吸 森はすべてあなたのものになれ――
- 75 雪のひま花びらていねいにふせる――

- 76 分院がこの世の果ての春の夜の――
- 77 はぐれたくなつて桜を踏んでいる――
- 78 尾びれのない国ははじめて花衣――
- 79 子猫うまく書棚にかくれているか――
- 80 鮮明な春風くちびるにあそぶ――
- 81 つつじ咲くらんりつしてた僕たち――
- 82 特攻はすこし死なずに春の水――
- 83 つらぬけないはなばなたちを置いて帰る――
- 84 少し手を戸惑うちゃんと土用灸――
- 85 さらわれるときまみどりの初夏が来る――
- 86 かんむりふらせ夏蝶がうまれる――
- 87 つかまってねいまはつなつの狩猟劇――
- 88 ゆびでつくる星から夏がやってくる――
- 89 夏シャツにまかせて睡る部屋が違う――
- 90 それなりにいびつな空の明急ぐ――
- 91 つめられてポストンバッグ誰かの夏――
- 92 だいとうあていこくを捨て海でキス――
- 93 かざかみのわたしとむらう海辺の暮(はか)――
- 94 路地裏のみずをあやして海月かな――
- 95 帰省した兄をみあげるきれいだなあ――
- 96 めがねの跡おもいだすとき柚子の花――
- 97 百合いつかひとをわすれる街にきて――
- 98 歯科医いつも狙う星があるだろう――
- 99 波いつも失うもののそばにゆく――
- 100 影を愛すようにうなばら秋を待つ――